

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 7 日現在

機関番号：33918

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2017

課題番号：26780366

研究課題名(和文) 青年中後期における他者軽視の発達の意義とその脱却の諸条件

研究課題名(英文) Developmental significance of undervaluing others in adolescence and young adults and various conditions for escape

研究代表者

小平 英志 (KODAIRA, Hideshi)

日本福祉大学・子ども発達学部・准教授

研究者番号：00442228

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本課題の目的は(1)他者軽視傾向の様々な活動への参加を促す初期動力としての機能、(2)自尊感情の変動による他者軽視への影響、(3)他者軽視の高い青年たちの諸特徴を検討することであった。大学生を対象に4年間の縦断調査を実施し、各時点での調査データ及び連結したデータを用いた解析を行った。その結果、大学入学後の他者軽視の増加は、部活動・サークル活動の活発さと関連すること、自尊感情の上昇は他者軽視の減少と関連すること、他者軽視の高い青年は協調性が低く、他者の模倣による自己変容を志向しにくいことが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：The present study examined 1) the effects of self-enhancement by undervaluing others on participating in extracurricular activities among the first year university students, 2) the influences on undervaluing others by the fluctuation of self-esteem, and 3) characteristics of university students who undervalue others. The results showed that changes in undervaluing others significantly affected the frequency of participating in club activities, increase of self-esteem affected undervaluing others, and undervaluing others was negatively related with agreeableness and imitation-oriented self-change.

研究分野：人格心理学

キーワード：他者軽視 仮想的有能感 自尊感情 大学生 縦断調査

1. 研究開始当初の背景

他者を軽視することで仮の有能さの感覚を得ようとする傾向である仮想的有能感(速水, 2006)は、現代的な自尊感情の補償のあり方として注目され、実証的検証が重ねられてきた。これまでの研究では、他者軽視の傾向が高いほど、様々な生活領域で不適応状態を呈することが明らかとなっている。例えば、他者軽視傾向が高いほど、抑うつや敵意感情の程度や変動が大きいこと、共感性が低いこと、二分法的思考の傾向が強いことなどが報告されている。さらに高校生を対象とした調査では、他者軽視傾向が高い生徒ほど、努力を軽視する傾向にあること、クラスメートと他者の批評を話題にやすく、学業で困った場合には友人や教師に援助を求めない傾向にあることなどが報告されている。

一方で、現代青年に特徴的な他者軽視傾向は、単に不適応な心理的傾向と考えると良いのだろうか。数少ないものの、他者軽視を行う個人の適応的側面を示す先行研究はいくつか見られる。例えば、速水・小平(2006)は、自尊感情が低い生徒の場合、外発的な動機づけに寄るものの、他者軽視の傾向が全般的に動機づけを高める方向で機能することを示している。また、政治的自己効力感を上げた小平(2014)では、他者軽視が高い青年ほど、政治に参加する資格があると自己評価する傾向にあることが報告されている。加えて Oshio, Kodaira, & Kukiya (2008) では、他者軽視が高い学生ほど、グループワークに積極的に貢献したと他者から評価される傾向にあった。これらは他者軽視傾向が何らかの自己高揚を生じさせ、具体的行動を生起させうる可能性を示唆している。

青年たちの「強がり」や「ビッグ・マウス」は必ずしも不適切なものとは言えない。未熟な自己を過度に意識することを止め、強がって見せ、自己を鼓舞することは、様々な役割にチャレンジする原動力ともなると考えられる。一般的に児童期後期では、幼児期から形成された肥大化した有能感が等身大の現実的な有能感へと修正されていく。続く青年期は、第二次性徴による身体の著しい変化から始まり、感情的に不安定な時期を迎え、自尊感情も低下しがちとなる。徐々に社会とのかかわりが深まる青年期中期・後期を迎えると、そのような自尊感情が不安定な状態のまま、段階的な社会参加を求められ、最終的に職業を選択することとなる。特に近年の高等教育では、就業や社会人になることを強く意識したカリキュラム(ex. 実習、インターンシップ等)が準備されており、自信があるなしにかかわらず、段階的な社会参加に取り組むことを求められる傾向にある。そのような状況の中で青年たちが、他者を軽視したり自己を非現実的に高く評価したりすることで、自尊

感情を補償しているのならば、そのような方略は一概に不適切なものとは言えない。

本研究では、高等教育機関に入学した青年期中後期にあたる青年達が、様々な活動を通して対人関係を広げ、大人社会との接触を段階的に進め、自身も大人社会の仲間入りを果たしていく社会参加のプロセスに注目し、そこに果たす他者軽視の役割を明らかにする。

2. 研究の目的

上記を踏まえ、本研究では青年期の段階的社会参加に及ぼす他者軽視の影響を、4年間の縦断調査により明らかにした。本課題の検討点は以下の3点であった。

(1) 段階的な社会参加が始まる青年期中期には、様々な活動への参加を促す初期動力としての他者軽視が肯定的な役割を果たすかどうかを検討する。

(2) 様々な段階的社会参加の経験は、自尊感情の変動とともに、他者軽視にどのように影響するのかを明らかにする。

(3) 他者軽視が高い青年たちの諸特徴についてさらに解明を進める。特に一般的パーソナリティ、自己形成・自己変容に注目し、他者軽視との関連を検討する。

3. 研究の方法

本課題では、約200名の大学生を対象に2014年度(T1)、2015年度(T2)、2016年度(T3)、2017年度(T4)の4年間の縦断調査を実施し、他者軽視や自尊感情の変化と他の心理変数および社会参加の様子を測定した。具体的には、T1では、ビッグファイブ理論に基づくパーソナリティ特性(TIPI-J、FFPQ)、T2からT4では自己形成意識、自己変容の志向性、部活動・サークル活動、アルバイトの状況を問う質問への回答を求めた。T4ではさらに社会的被受容感に関する項目も含まれていた。また、T1からT4までは共通して他者軽視尺度と自尊感情尺度が含まれていた。

4. 研究成果

(1) 様々な活動への参加を促す初期動力としての他者軽視の肯定的役割

T1とT2の調査データを用いて他者軽視傾向がサークル・部活動への参加に及ぼす影響について解析を行った。共分散構造分析を用いた潜在差得点モデルによる検討を行った結果、他者軽視のレベル(T1の得点)はいずれの課外活動の指標に対しても有意な効果は認められなかった(Figure 1)。一方で、他者軽視の変化から部・サークルの累積所属数($r = .27$)と現所属数($r = .21$)に対して有意な効果が見られた。モデルの適合度指標はCFI=.98、RMSEA=.03と十分な値を示していた。このことから、他者軽視傾向の当初の高さではなく他者軽視傾向

の変化量が部・サークルの所属を予測し、他者軽視を高めたものほど所属数が多い傾向にあることが明らかとなった。

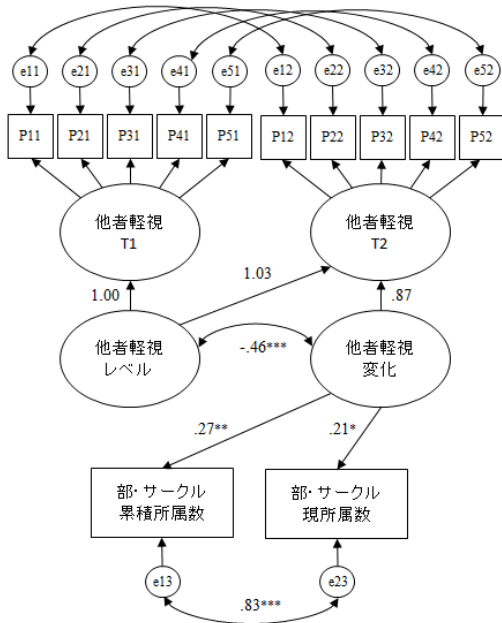


Figure 1 他者軽視とその変化量が部・サークル所属数に及ぼす影響

(2) 自尊感情と他者軽視傾向の変動の関連

T1 から T4 まで連結したデータ ($n=230$) を用いて、自尊感情の変化量と他者軽視の変化量の関連を検討した。共分散構造分析による潜在成長曲線モデルを用いた解析を行ったところ、大学4年間の自尊感情の傾きと他者軽視の傾きは相互に負の影響を及ぼしていることが確認された (Figure 2)。

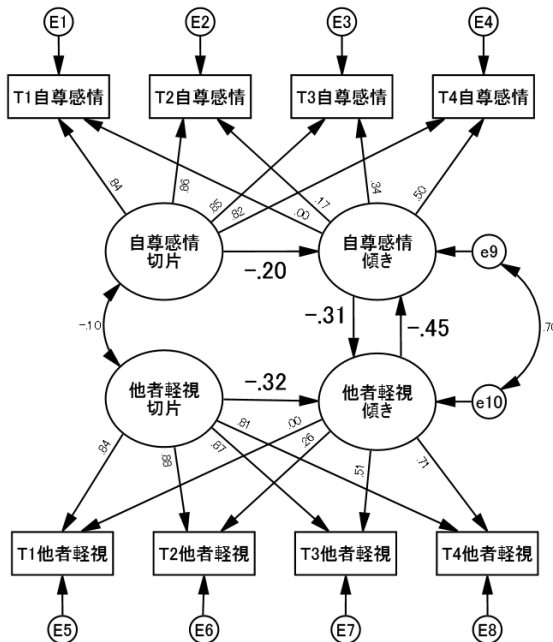


Figure 2 自尊感情の傾きと他者軽視の傾きの因果関係

適合度はやや低い値を示し (CFI=.94、

RMSEA=.07) モデルに改善の余地はあるものの、様々な経験の中で自尊感情を高めていくことが他者軽視の減少に寄与する可能性が示唆された。

(3) 他者軽視を特徴とする青年たちの特徴

他者軽視を特徴とする青年たちの特徴として、ビッグファイブ理論に基づく一般的パーソナリティ特性、自己形成意識、自己変容の志向性に注目し、他者軽視の傾向との関連を検討した。

ビッグファイブ特性との関連 まず T1 の調査データ ($n=286$) を用いてビッグファイブ理論に基づくパーソナリティ特性との関連を検討した。TIPI-J および FFPQ-50 を用いて他者軽視との相関係数を算出したところ、2 種の尺度のいずれとも協調性と負の関連を示した。これは他者軽視の傾向が高い青年が、対人関係上も不適応状態を呈しやすいためという先行研究と整合する結果であった。ただし、一部性差も見られ、今後、一般的パーソナリティとの関連についてより詳細な検討が必要であると考えられた。

Table 1 他者軽視との相関関係

	<i>r</i>	95% 信頼区間
自尊感情	-.09	(-.21~.03)
TIPI-J		
外向性	-.02	(-.14~.09)
協調性	-.18 **	(-.29~-.07)
勤勉性	-.10 †	(-.22~.02)
神経症傾向	.06	(-.05~.18)
開放性	.11 †	(.00~.23)
FFPQ-50		
外向性	.05	(-.07~.17)
愛着性	-.27 ***	(-.37~-.15)
統制性	-.01	(-.13~.11)
情動性	.21 ***	(.10~.32)
遊戯性	.11 †	(-.01~.22)

† $p < .10$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

自己変容の志向性との関連 T2 と T3 の調査データを用いて自己変容と他者軽視傾向との関連を検討した。自尊感情との交互作用も考慮した階層的重回帰分析の結果 (Table 2) いずれの交互作用も有意ではなく、他者軽視からは模倣志向に対する影響のみが有意であった。

別の大学生を対象とした調査を追加で実施し、同一の解析を行ったところ、模倣志向との負の関連は安定的に確認された。

さらに T2 と T3 を連結した縦断データを用いて因果関係の検討を行ったところ (Figure 3) 他者軽視から模倣志向、模倣志向から他者軽視への効果はいずれも有意ではなかった。つまり、自己形成や自己変容については、他者軽視との因果的な関係

にあるものは確認できず、今後、他者軽視傾向の高い青年の自己形成や自己変容のあり方について別の角度からの検討が必要であることが示唆された。

Table 2
交互作用項を含めた階層的重回帰分析の結果

	β			R^2
	他者軽視	自尊感情	交互作用項	
自己形成意識				
拡大的形成	-.02	.19 *	.02	.04
充足的形成	-.09	.13 †	.04	.03
自己変容の志向性				
一新志向	-.12	-.31 ***	.03	.12
懐古志向	-.01	-.03	.04	.00
改善志向	-.02	-.04	-.03	.00
確立志向	.01	-.17 *	-.06	.03
全面変容志向	.05	-.34 ***	.01	.12
展望志向	-.11	-.15 †	.06	.04
憧憬志向	-.13 †	.17 *	.01	.04
変容追求志向	.10	.13	.11	.04
模倣志向	-.24 **	-.13	.03	.08

† $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

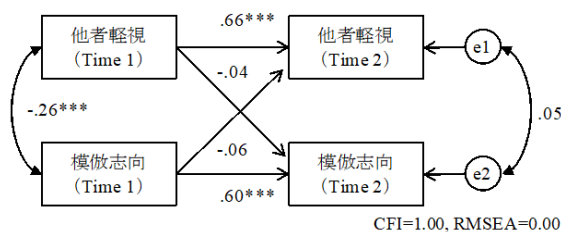


Figure 3 他者軽視と模倣志向の因果関係

<引用文献>

速水 敏彦. (2006). 他人を見下す若者たち: 講談社現代新書.
 速水 敏彦・小平 英志 (2006). 仮想的有能感と学習観および動機づけとの関連. パーソナリティ研究, 14(2), 171-180.
 小平 英志 (2014). 大学生の他者軽視傾向が政治的自己効力感および政治関与に与える影響. 日本福祉大学子ども発達学論集(6), 1-10.
 Oshio A., Kodaira, H., & Kukiya, K. (2008). Do members undervaluing others contribute to group activities? 2008 Annual meeting of Society for Personality and Social psychology, 181-182.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

小平 英志 (2017). 大学生の他者軽視傾向と自己形成意及び自己変容の志向

性 - 相関関係・因果関係の分析から - 現代と文化, 第 136 号, 1-14. 査読なし, <https://nfu.repo.nii.ac.jp>

小平 英志 (2015). 他者軽視傾向と一般的パーソナリティ - ビッグファイブとの関連の性差に注目して - 現代と文化, 第 132 号, 19-33. 査読なし, <https://nfu.repo.nii.ac.jp>

[学会発表](計4件)

小平 英志・浦上 昌則 (2017). 成人期初期の就業と社会的被受容感-尺度作成に向けた検討 - 日本青年心理学会第 25 回大会発表論文集, 58-59.

小平 英志 (2016). 大学生の他者軽視傾向と自己形成、自己変容の志向性 日本青年心理学会第 24 回大会発表論文集, 40-41.

Kodaira, H. (2016). Changes in undervaluing others by Japanese university freshman and its positive effects on extracurricular activities. 31st International Congress of Psychology, PS28A-14-341.

小平 英志 (2015). 他者軽視傾向とパーソナリティ - 性差を考慮した Big Five との関連 - 日本心理学会第 79 回大会発表論文集, 2AM-004.

[図書](計0件)

6. 研究組織

(1)研究代表者

小平 英志 (KODAIRA, Hideshi)
 日本福祉大学・子ども発達学部・准教授
 研究者番号: 00442228